



資料3

# 第26回 休眠預金等活用審議会 提出資料

一般財団法人 日本民間公益活動連携機構

2020年12月21日



## 基本的な課題認識と対応方針

- 2019年度に資金分配団体として採択をされた各団体とJANPIAにおいては、事業の進捗状況に応じて、事務フロー、及びシステムについて、協働の中で構築を行ってきた。
- これまでも、資金分配団体のPOをはじめ事務担当者各位や経営層との多元的な意見交換などを踏まえて一部改善を図るなどの対応を行ってきたところであるが、**事務作業の負荷軽減等の要望は多く、継続的なPDCAサイクルを回すことにより改善が必要**と理解。
- また、資金分配団体PO相互間の学び合いや経験の共有を創出する取り組みへの評価と期待は高く、今後も総合の学び合いや発信の機会創出の取り組みをさらに強化していく。
- そのために、本年度のPO研修での双方向性の確保や新たなコミュニケーションツール（Slack）の導入も行う等対応を進めているところ。
- 改善に向けて、全体の事務フローを見渡し、資金分配団体・実行団体へのアンケートの実施、および有志を巻き込んだ検討PTを設置し、双方向に納得感のある改善策を見出して行きたい。

# 具体的な対応方針①

	課題認識（主な指摘事項）	対応方針等
1	<p>事務処理の負荷が資金分配団体において大きくなっている</p> <p>①計画性なく、次々に報告書類の作成・提出などの要請があり対応が困難</p> <p>②月1回の面談など、定期面談にも時間を割かれる</p>	<p>① 事業の進捗に応じて必要な報告書類等（書式や報告システムの画面開発等）を行ってきたため、「計画性がない」と受け止められた面があるが、<u>2年度目以降は年間を通したスケジュール等を示し、各団体の事業運営に支障が生じないように配慮したい。</u></p> <p>※12/10、11日に年度末の精算処理に向けた資金分配団体向け勉強会を開催した</p> <p>②月1回の面談は、<u>資金分配団体⇔JANPIA、資金分配団体⇔実行団体</u>では必要と理解（不正行為につながりかねない事象の端緒を認識する機会となるなどの<u>実際の事例がある</u>）、むしろ1回にとどまらず、頻度を多くもっていただくべきと 思料</p>
2	<p>助成システムの操作性など</p> <p>①セールスフォースを基盤としたシステムであるが、ユーザビリティが低い</p> <p>②機能開発が段階的であるため、マニュアルが一元化されておらず、新機能リリースの都度マニュアルが公開されており、キャッチアップが困難</p>	<p>①JANPIAとし同様の認識であり、動画付きのマニュアルの公開など工夫はしているところ。年度内には基本機能開発が終了するため、それらの<u>ユーザーインターフェイスの向上という面、機能性向上、一方でのデータベースとしての機能確保面の両立を図れるよう、資金分配団体、実行団体の声を伺いながら運用面の改善や新年度の追加開発を行う。</u></p> <p>②上資金分配団体による実行団体向けのシステム操作等の支援業務の軽減に資する、<u>マニュアル類の再整備（基本操作編と詳細機能編に分けるなど）</u>やJANPIAによる機能・操作に関する（ニーズに沿った）<u>勉強会の定期的な実施、カスタマーセンター機能の設置等の検討を行う。</u></p> <p>※ <u>必要な要員の確保も検討</u></p>

# 具体的な対応方針②

	課題認識（主な指摘事項）	対応方針等
3	<p>JANPIAの伴走支援</p> <p>①管理面に偏った支援になっている</p> <p>②事業運営に資する支援をしてほしい 例) 管理面を支援する部門と事業進捗をサポートする役割の分離など</p>	<p>①年度内の報告関連作業（精算業務など）を経たうえで、1年間全体の事務フローを振り返り、改善に向けた検討を実施する。 また、<u>事務処理関連の一部（例：精算業務等）を集中的にサポートするバックオフィス機能を確保し、事業運営に資する支援に必要な時間を創出する。</u></p> <p>②JANPIAのPO自身の指定活用団体のPOとして必要な資質の向上のために、以下に取り組んでいるところ。 ●POの役割の棚卸、自身の行動の振り返り等（専門家による個別面談とコーチングの実施（2020年10月実施） ⇒ <u>自己研鑽と日々の実践、組織としてのサポートによりPO業務の質を向上すべく引き続き取り組む。</u></p>
4	<p>実行団体への支援における課題</p> <p>①ガバナンス・コンプライアンス体制整備を目的として、膨大な規程類の整備を団体の規模を問わず一律に過剰に強いている</p> <p>②システムを実行団体にも使っただくにあたり、その支援は資金分配団体の役割になっている。使いやすいシンプルにする、JANPIAが直接支援するなど改善できないか？</p>	<p>①緊急支援事業では、公募申請時に規程類の提出を求めない（「規程類確認書」による確認のみとした）、事業実施期間中に規程類の整備を求める（一律に規程類を整備するのではなく、<u>団体の規模や実情に応じて必要なガバナンス・コンプライアンス体制の整備を求めている</u>）などとしている。 これらの状況を見ながら2019年度通常公募、2020年度通常公募の実行団体向けのガバナンス・コンプライアンス体制整備の在り方を見直したい。</p> <p>②上記2. ②に記載の通り</p>

# その他の課題について

**以下の指摘については、基本計画等を踏まえつつ、対応方針について検討し、2021年度事業計画への反映等を行っていく**

## <公募要件等について>

- 資金分配団体の公募に際し、同一事業での毎年の申請ができないこととしていることについて、「より多くの受益者への展開の観点から見直しをしてほしい」との意見
- 助成金の20%を自己資金として確保を求めることについて、「コロナ禍において、資金分配団体・実行団体共に難しい状況となっている」との意見（※緊急支援助成事業においては当該要件は緊急性に鑑み削除している）

## <事務処理面について>

- 自己資金について、「休眠預金専用口座で助成金と一元的に管理することが、事務を複雑化させている」との意見
- 評価に関する作成資料等について、「団体の規模・実状に応じた質・量の面で柔軟性を有していない」との意見
- 資金分配団体の1事業あたり助成額の目安について、「資金分配団体の実績に関わらず適用される」との意見

## <広報面について>

- 助成システムについて「入力を求められる様々な事項・データがどのように活用されるのかが分からない」との意見
- 「一般に向けても情報発信が十分ではない」、「本事業での活動状況が外部から見えにくい」との意見  
⇒ 広報活動（主体的な情報発信、シンボルマークの積極活用、HPリニューアル、SNSの活用、など）について、JANPIAのPOの意見、資金分配団体、関係者、有識者等から意見を聴取しており、これらを踏まえて着手できるところから順次実施。



## <参考> 休眠預金活用のシンボルマークについて

# 休眠預金を活用した事業のシンボルマークとセットで表記する「標語」が決まりました。

全国315件の応募作品から、「**舞い上がれ 社会を変える みんなの力**」が選ばれました。

※メイン標語として活用していきます！

本作品の作者への表彰状の授与式を12月16日に挙行了しました。

**作者：根本大輔さん（東京都在住）** ※根本さんは、資金分配団体のプログラムオフィサーです

また、サブ標語として、

- ・**咲かせよう 笑顔の花を 未来まで**
- ・**広げよう 地域に根ざす 支援の輪**

の2作品も選ばれました。事業の内容に応じて活動の現場で活用されます。

**作者：大村 慧さん（山形県在住）**



### ●メイン標語とシンボルマーク



### <根本さんコメント抜粋>

休眠預金が、民間公益活動を行う団体である実行団体の活動の支援の他、組織の基盤を強化する支援などにも活用されることを踏まえ、休眠預金を活用した活動が、このデザインのように大空を舞って広がり、タンポポのように地域に根付いて花開いてほしいという思いを標語にも込めました。

